

中学校運動部に対する小学生の入部意欲特性と体力との関連

一部活動の地域展開に伴う多様な活動内容の探索－

大坪 健太 (岐阜協立大学経営学部)

キーワード：部活動改革、地域移行、体力格差

1. 緒言

近年、日本における部活動を取り巻く環境が変わりつつある。2020年9月に文部科学省より発表のあつた「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」(文部科学省, 2022)において休日の部活動の段階的な地域移行が具体的な方策として示された。その後、2022年に運動部活動の地域移行に関する検討会議提言(運動部活動の地域移行に関する検討会議, 2022)の中で示された改革の方向性として、地域におけるスポーツ機会の確保、生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実、地域スポーツの振興の3つが掲げられた。その中でも、生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実に関して、2018年に策定された運動部活動の在り方にに関する総合的なガイドライン(スポーツ庁, 2018a)において、生徒の多様なニーズに応じた活動を行うことができる運動部を設置すると記されている。その後、2022年において運動部活動と文化部活動に関するガイドラインを統合した上で全面的に改訂がなされた学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方にに関する総合的なガイドライン(スポーツ庁・文化庁, 2022)においても、多様なニーズに応じた活動を行うことができる環境を整備することが記されている。しかしながら、スポーツ庁による多種目等の新しい活動の実施検討状況に関する調査(スポーツ庁, 2024a)によると、多様な種目等を体験する活動やレクリエーション的な活動などを実施している自治体は1割程度に留まっており、実施を検討・調整している自治体を含めても約4割であることが報告されている。これらのことから、半数以上の自治体において生徒の多様なニーズにあった活動機会が十分に担保されているとは言い難い現状にあるといえる。

運動部活動に対する生徒のニーズに関して、杉浦・渡邊(2016)は、男子生徒は活動内容や中学入学以前の活動を継続して行う傾向が強く、女子生徒は周りの環境や友人関係が部活動選択に関係すると報告している。また、運動部活動に所属している者のうち勝利志向の生徒が7割を占めるが、楽しむ志向の生徒も3割存在していることや、自身が所属している運動部と生徒自身の志向性が一致している者は6割程度であることが報告されている(武長, 2018)。これらの運動部に対する選択理由や志向性に関する研究に加えて、特定の運動種目を対象に部活動とクラブチームを選択した理由を比較した研究もみられる(中澤, 2002; 大林ほか, 2024)。しかしながら、子どもの体力の二極化が進行(スポーツ庁, 2024c)しており、体力格差の問題が指摘される現代において体力との関係について調査した研究は少なく、体力水準の違いによって運動部に対するニーズや入部意欲特性は異なることが考えられる。加えて、中学校運動部に関する先行研究は中学生を対象とした研究がほとんどであり、自身の通う学校における運動部あるいは所属している運動部の在り方による影響を受けている可能性が考えられる。

そこで、本研究では中学校入学前の段階にある小学5年生を対象に中学校運動部活動に対する入部意欲特性と体力水準との関連について検討することを目的とした。現行の部活動に関するガイドライン(スポ

ーツ庁・文化庁, 2022)において、運動が苦手な生徒に対する工夫や配慮の必要性が明記されていることも踏まえると、体力水準の違いに着目し体力の低い子どもの運動部活動に対する意識を調査することは多様なニーズに対応した活動の在り方を模索するうえで有用な知見となると思われる。

2. 方法

2. 1. 対象

対象は、G県T市の小学校13校に通う461名の児童のうち、研究参加への同意が得られ、且つデータの欠損のない小学5年生児童410名（男子195名、女子215名）であった。

2. 2. 調査・測定項目

本研究では、対象者の通う各学校において実施され、保管されている新体力テストの結果を収集とともに、対象の児童に対して運動部への入部意欲に関する質問紙調査を実施した。新体力テストにおける測定項目は、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、シャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げの計8項目である。体力データについては、個人を特定できないように匿名化の処理を施すとともに児童に対する質問紙調査と同一のID番号が付与されたデータを回収した。

児童に対する質問紙調査における調査内容は、調査協力を得た各学校より児童に回答を依頼した。調査の結果は、ID番号を用いてデータの照合を行い体力データと連結した。

2. 3. 分析項目

2. 3. 1. 体力

体力測定結果より、各測定項目の評価基準（文部科学省, 1999）に従って体力の得点合計を男女別にそれぞれ算出し、体力総合得点とした。

2. 3. 2. 運動部への入部意欲特性

調査票は、スポーツ庁による全国体力・運動能力、運動習慣等調査（スポーツ庁, 2018b）における質問項目を参考に、運動部への入部意欲に関する項目として「中学校に入学したら運動部に入りたいか」、希望する運動部像に関する項目として「試合で勝つことが目的の部」、「土日も練習や試合がある部」、「そのスポーツの経験や知識がある指導者がいる部」、「いろんなスポーツを楽しむ部」、「季節ごとに行うスポーツを変える部」、「自分たちで活動の内容を考えて行う部」、「他の学校の生徒と交流する部」、「練習が厳しい部」、「みんなが試合に出る部」、「試合や大会で強い部」の計11項目から構成された。回答は5件法（5.とても入りたい～1.入りたくない）のリッカートスケールを用いた。全ての質問項目は、設問ごとにその選択肢に応じて得点を付与する形で得点化し、分析に用いた。

2. 4. 解析方法

入部意欲および希望する運動部像と体力水準との関連について検討するために χ^2 検定を行った。 χ^2 検定において有意な関連が認められた場合には残差分析を適用した。

3. 結果

表1および表2は、各質問項目における χ^2 検定および残差分析の結果を示している。体力水準と運動部への入部意欲との間に有意な関連が認められた（表1）。残差分析の結果、体力評価A群において「とても入りたい」と答えた割合が有意に高く、「どちらともいえない」、「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合はそれぞれ有意に低い割合を示した。体力評価C群における「どちらともいえない」の割合は有意に高く、「あまり入りたくない」の割合が有意に低かった。体力評価D群における「とても入りたい」の割合が有意に低く、「どちらともいえない」の割合が有意に高かった。体力評価E群における「とても入りたい」の割合は有意に低く、「あまり入りたくない」と回答した割合は有意に高かった。

体力水準と希望する運動部像との関連について、10項目全てにおいて有意な関連が認められた（表2）。試合で勝つことが目的の部では、「入りたい」の割合が体力評価B群において有意に高く、C群では有意に低かった。D群では「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合が有意に高かった。E群では「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。土日も練習や試合がある部では、A群における「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に高く、「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合が有意に低かった。B群における「入りたくない」の割合が有意に低く、C群における「あまり入りたくない」の割合が有意に高かった。D群における「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合が有意に高かった。E群における「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。そのスポーツの経験や知識がある指導者がいる部では、A群における「とても入りたい」の割合が有意に高く、「どちらともいえない」の割合が有意に低かった。B群における「入りたい」の割合が有意に高く、「入りたくない」の割合が有意に低かった。C群における「どちらともいえない」の割合が有意に高かった。D群における「あまり入りたくない」の割合が有意に高かった。E群における「とても入りたい」の割合が有意に低く、「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合が有意に高かった。練習が厳しい部では、A群における「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に高く、「入りたくない」の割合が有意に低かった。B群では、「どちらともいえない」の割合が有意に高く、「入りたくない」の割合が有意に低かった。C群では、「入りたい」の割合が有意に低かった。D群では、「とても入りたい」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。E群では、「どちらともいえない」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。試合や大会で強い部では、A群における「とても入りたい」の割合が有意に高く、「あまり入りたくない」の割合が有意に低かった。B群では、「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合が有意に低かった。D群では、「とても入りたい」の割合が有意に低く、「あまり入りたくない」および「入りたくない」の割合が有意に高かった。E群では、「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。みんなが試合に出る部では、B群における「入りたくない」の割合が有意に低かった。D群では、「あまり入りたくない」の割合が有意に高かった。E群では、「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。いろんなスポーツを楽しむ部では、A群における「あまり入りたくない」の割合が有意に低かった。D群における「とても入りたい」の割合が有意に低かった。E群では、「入りたくない」の割合が有意に高かった。季節ごとに行うスポーツを変える部では、C群における「どちらともいえない」およびE群における「入りたくない」の割合がそれぞれ有意に高かった。自分たちで活動の内容を考えて行う部では、A群における「どちら

ともいえない」、D群およびE群における「入りたくない」の割合がそれぞれ有意に高かった。他の学校の生徒と交流する部では、A群における「とても入りたい」の割合が有意に高く、「入りたくない」の割合が有意に低かった。E群では、「入りたくない」の割合が有意に高かった。

表1 体力水準と運動部への入部意欲との関連

項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	入りたくない
中学校に入学したら運動部に入りたいか	A	70.1%	+	20.9%	9.0% #	0.0% #
	B	49.2%		23.3%	18.3%	5.8%
	C	42.6%		22.0%	27.7% +	2.8% #
	D	29.0% #		22.6%	25.8% +	16.1%
	E	0.0%	#	5.0%	30.0%	30.0% +

$\chi^2=104.67$, p<0.05

+ : 残差分析で有意に高い割合, # : 残差分析で有意に低い割合

表2 体力水準と入部意欲特性に関する各項目との関連

項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	
試合で勝つことが目的の部	A	26.9%		37.3%	23.9%	7.5%	4.5%	A	41.8%	29.9%	20.9%	4.5%
	B	25.8%		35.0% +	28.3%	8.3%	2.5%	B	35.0%	36.7%	20.8%	5.8% #
	C	18.4%		21.3% #	35.5%	17.0%	7.8%	C	31.9%	29.1%	23.4%	9.2% #
	D	11.3%		24.2%	24.2%	22.6% +	17.7% +	D	21.0%	30.6%	16.1%	19.4% +
	E	0.0% #		5.3% #	42.1%	0.0%	52.6% +	E	10.0% #	0.0% #	25.0%	15.0%

$\chi^2=87.66$, p<0.01

$\chi^2=85.08$, p<0.01

項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	
土日も練習や試合がある部	A	37.3% +		28.4% +	19.4%	6.0% #	9.0% #	A	47.8%	26.9%	16.4%	7.5% #
	B	21.7%		22.5%	26.7%	18.3%	10.8% #	B	43.3%	35.8%	10.8%	6.7% #
	C	14.9%		17.7%	25.5%	24.8% +	17.0%	C	37.6%	34.0%	14.9%	9.2% #
	D	6.5% #		9.7%	27.4%	21.0%	35.5% +	D	25.8% #	37.1%	17.7%	11.3% #
	E	0.0% #		0.0% #	20.0%	25.0%	55.0% +	E	25.0%	20.0%	15.0%	5.0% #

$\chi^2=75.23$, p<0.01

$\chi^2=46.55$, p<0.01

項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	
そのスポーツの経験や知識がある指導者がいる部	A	62.7% +		23.9%	10.4% #	3.0%	0.0%	A	23.9%	19.4%	29.9%	17.9%
	B	43.3%		36.7% +	17.5%	2.5%	0.0% #	B	23.3%	23.3%	25.0%	20.0%
	C	40.0%		27.1%	25.7% +	4.3%	2.9%	C	14.2%	23.4%	36.2% +	16.3%
	D	32.3%		27.4%	21.0%	12.9% +	6.5%	D	9.7%	33.9%	25.8%	24.2%
	E	5.0% #		10.0%	25.0%	20.0% +	40.0%	E	15.0%	15.0%	10.0%	25.0%

$\chi^2=118.65$, p<0.01

$\chi^2=32.14$, p<0.01

項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	
練習が厳しい部	A	20.9%	+	34.3% +	25.4%	10.4%	9.0% #	A	20.9%	38.8% +	23.9%	13.4%
	B	8.3%		18.3%	40.8% +	17.5%	15.0% #	B	22.5%	27.5%	35.0%	10.8%
	C	13.5%		9.9% #	28.4%	19.9%	28.4%	C	26.2%	26.2%	27.0%	13.5%
	D	1.6% #		9.7%	24.2%	25.8%	38.7% +	D	16.1%	29.0%	30.6%	8.1% #
	E	0.0%		0.0%	10.0% #	25.0%	65.0% +	E	25.0%	15.0%	15.0%	10.0% #

$\chi^2=81.30$, p<0.01

$\chi^2=38.06$, p<0.01

項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	項目	体力評価	とても入りたい	入りたい	どちらともいえない	あまり入りたくない	
試合や大会で強い部	A	44.8% +		32.8%	17.9%	1.5% #	3.0%	A	35.8% +	34.3%	19.4%	9.0%
	B	37.5%		32.5%	24.2%	3.3% #	2.5% #	B	20.8%	22.5%	34.2%	15.8%
	C	31.2%		24.1%	25.5%	11.3%	7.8%	C	19.1%	27.0%	27.7%	17.7%
	D	16.1% #		17.7%	33.9%	16.1% +	16.1% +	D	11.3%	33.9%	27.4%	14.5% #
	E	10.0% #		5.0% #	15.0%	15.0%	55.0% +	E	10.0%	15.0%	25.0%	5.0% #

$\chi^2=98.50$, p<0.01

$\chi^2=38.06$, p<0.01

+ : 残差分析で有意に高い割合, # : 残差分析で有意に低い割合

4. 考察

本研究は、中学校入学前における小学5年生を対象に中学校運動部活動に対する入部意欲と体力水準の

違いおよび入部意欲に影響を与える要因について検討した。

分析の結果、体力水準と運動部への入部意欲との間に有意な関連が認められた。体力水準の違いによって中学校運動部への入部意欲が異なり、体力が高い小学生ほど中学校運動部への入部意欲が高い傾向にあることが示唆された。本研究の調査対象における運動部への積極的な入部意欲を持つ児童の割合は7割程度であり、同一時期における運動部活動への加入率に関する全国調査（笛川スポーツ財団、2024）と比較すると1割程度高かった。体力水準に着目すると、体力評価が低いD群およびE群における「とても入りたい」と回答した児童の割合が他の3群と比較して有意に低かったことから、中学校運動部への加入率には体力の高低が関連することが考えられる。特に、体力評価E群の児童における「とても入りたい」および「入りたい」の割合が他の群と比べて有意に低かったことからも、体力が顕著に低い児童は中学校入学以降の運動部への入部に対しては消極的であることが示唆された。中学校における部活動の選択理由を調査した研究（杉浦・渡邊、2016）によれば、男女ともに「楽しそうだから」と回答する中学生の割合が高いことが報告されている。運動部への加入は義務ではなく本人に選択の自由があるものであることには留意が必要だが、現在の運動部の在り方は体力の低い児童にとって楽しそうなものであると認識されにくいことが結果として、入部意欲の低さにつながる可能性が考えられる。

体力水準によって運動部への入部意欲が異なる可能性が示唆されたことから、より詳細な入部意欲特性を検討するために希望する運動部像との関連を検討した結果、10項目全てにおいて有意な関連が認められた。いずれの項目においても、体力水準の高い群における入部意欲が高く、体力の低い群における入部意欲が低い傾向がみられた。試合で勝つことが目的の部、土日も練習や試合がある部、練習が厳しい部および試合や大会で強い部の4項目においては競技志向に関する質問項目であるが、D群およびE群における「入りたくない」の割合が有意に高かった。運動部の志向性に関して、約8割の運動部が勝利志向であることが報告されている（武長、2018）。加えて、所属している運動部と生徒自身の志向性が一致していない生徒の場合、運動部での悩みや不満の割合が高くなることが示されている（武長、2018）。本研究におけるボリュームゾーンであるC群においても、競技志向である運動部への積極的な入部意欲を持つ児童の割合は試合や大会で強い部を除く3項目において4割未満であることを考えると、運動部における志向性に関しては学校や指導者主体で考えるのではなく、運動・スポーツの主体者である子どもを中心に据えた検討が必要であると考えられる。そのスポーツの経験や知識がある指導者がいる部に関して、E群を除く4群において「とても入りたい」および「入りたい」と回答した児童の割合が半数以上を占めていた。このことから、大多数の児童は運動部の指導を経験あるいは知識のある指導者から受けたいと感じていることが示唆された。地域クラブ活動の課題として認識する事項に関して、指導者の量の確保的回答が最も多い（スポーツ庁、2024a）ことからも、指導者の量と質の担保が容易でないことは予想されるが、運動部の主体者である子どものニーズが高いことからも、その課題解消が期待される。地域人材の把握を実施している自治体が半数以下であることや、人材バンクやマッチングの仕組みづくりを行っている自治体は2割に満たない現状にある（スポーツ庁、2024a）ことをふまえると、今後人材確保の仕組みをどのように構築していくかが重要であると考えられる。みんなが試合に出る部では、競技志向に関する質問項目と同様に、E群の「とても入りたい」および「入りたい」の割合が有意に低く、「入りたくない」の割合が有意に高かった。体力は運動有能感と関連することが指摘されており、体力の低い児童は運動有能感も低いことが予想される。運動有能感の低さが、試合に出たくないという気持ちに繋がっていると考えられる。一方で、そのスポーツの経験や知識がある指導者がいる部と同様に統計的有意性は認められないものの、E群を除いた4群において「とても入りたい」および「入りたい」の割合が5割を超えていた。このことから、児童全体のニーズとしては実力に関わらず誰もが試合に出ることを希望していることが推察される。勝利至上

主義から脱却し、試合に出ることを望んでいる子どもをできる限り試合に出場させ、機会の平等を担保することが指導者には求められるのかもしれない。

いろんなスポーツを楽しむ部、季節ごとに行うスポーツを変える部および自分たちで活動の内容を考えて行う部の3項目では、他の質問項目と同様にE群において「入りたくない」の割合が有意に高かった。しかしながら、「とても入りたい」および「入りたい」の積極的入部意欲の割合が3割を超えており、他の4群との割合差が少ない傾向がみられた。また、5群全体においてもいろんなスポーツを楽しむ部に対する入部意欲はそのスポーツの経験や知識がある指導者がいる部に次いで高かった。休日や長期休暇期間中などにおいて多様な種目等を体験する活動を取り入れている自治体は約1割であり、実施を検討・調整している自治体を含めると4割程度であることが報告されている（スポーツ庁、2024a）。また、日本の部活動においては複数の競技を行う機会が海外の部活動に比べると少なく、比較的複数の競技を行いにくいシステムであると指摘されている（小松ほか、2024）。これらのことから、生徒が複数のスポーツをする所謂マルチスポーツ型で運動部活動を運営することは容易ではないと思われるが、子どものニーズのみならず、学習指導要領（文部科学省、2017；スポーツ庁、2024b）において、複数のスポーツや文化・科学分野等の様々な活動も含めて幅広く経験できるよう配慮することが大切であると記されていることからも、実施に向けた前向きな議論が望まれる。マルチスポーツ型の運動部活動に関連して、本研究においては季節ごとに行うスポーツを変える部に対する入部意欲は他の質問項目と比較して高いものではなかった。海外の部活動はシーズン制で他種目を経験するシステムであり（小松ほか、2024）、スポーツの2シーズン制（季節性）が有効であるという指摘（西尾ほか、2021）もみられる。複数の種目を行うことや、自分たちで活動内容を考えることには体力水準に関わらず肯定的な子どもが多いことをふまえると、実施種目を考える際の1つの手がかりとして運動・スポーツそれぞれが有するであろう季節性を取り上げることも有効である可能性がある。他の学校の生徒と交流する部に関して、A群における「とても入りたい」の割合が、E群における「入りたくない」の割合がそれ有意に高かった。この点に関して、他者との比較は運動能力が低位な者の劣等感を増幅させること（波多野・中村、1981）や、体育授業が嫌いな者は仲間に笑われることや運動技能に対するネガティブな発言により体育授業における回避的な行動を示す傾向にあること（當山ほか、2021），体育嫌いである者は他者と比較されることに対して強い嫌悪感を示すこと（大坪ほか、2022）が指摘されている。体育授業と運動部活動との違いには留意する必要はあるものの、交流を促すことが却って他者との比較の機会を増加させることによる運動嫌いに繋がってしまう悪循環は避けなければならない。スポーツ庁の調査（スポーツ庁、2024a）において、ニーズを感じる大会形態として交流を主な目的とした大会と回答する自治体が多いことが報告されているが、前述したように体力の低い子どもや運動有能感の低い子どもの特性を理解したうえで交流の在り方を工夫しながらの大会運営が必要であると考えられる。

以上のことから、中学校運動部活動においては、体力水準の違いが入部意欲に影響を及ぼすことが示唆された。特に、体力が低い児童ほど競技志向の運動部に対する入部意欲が低く、積極的な参加が難しい傾向がみられた。加えて、指導者の存在や、楽しさを重視する活動形態は、体力の違いに関わらず入部意欲を高める要素であることが示された。これらの結果は、今後の部活動の地域展開を進める上で、体力や運動有能感に自信のない生徒が取り残されることのないよう、配慮が必要であることを示唆している。具体的には、指導者の確保や育成の充実に加えて、勝利志向に偏らない多様な活動形態の整備や、体験機会の拡充が求められるだろう。すべての生徒が自らの興味や関心に応じてスポーツに親しみ、運動の楽しさを実感できる環境づくりが重要である。

5. 結論

本研究は、小学5年生児童410名を対象に、中学校運動部に対する入部意欲およびその影響要因について体力水準の違いに着目して検討することを目的とした。分析の結果、以下の結論を得た。

小学5年生の体力水準と中学校運動部への入部意欲には関連がみられ、体力水準が高い児童ほど、中学校運動部への積極的な入部意欲が高い傾向がみられた。一方で、体力の低い児童は競技志向の運動部に対する入部意欲が低く、入部に対して消極的な傾向が顕著であった。経験や知識のある指導者がいる運動部に対しては多くの児童が入部を希望する傾向がみられ、指導者の存在が入部意欲に与える影響の重要性が示唆された。いろんなスポーツを楽しむ部や、自分たちで活動内容を考える部では、体力の低い群においても一定の入部意欲が確認され、活動内容の柔軟性は多様な児童のニーズに対応し得る重要な要素であると示唆された。

参考文献・引用文献

- 波多野義郎・中村精男（1981）「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究。体育学研究, 26 (3) : 177-187.
- 小松友哉・隅野美砂輝・関朋昭（2024）日本におけるマルチスポーツの「場」の検討：部活動とタレント発掘事業を通じて。体育・スポーツ経営学研究, 38 : 77-90.
- 文部科学省（1999）新体力テスト実施要項. https://www.mext.go.jp/sports/content/1408001_1.pdf, 2025年3月10日参照.
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編. 東山書房：京都.
- 文部科学省（2022）学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について. https://www.mext.go.jp/sports/content/20200902-spt_sseisaku01-000009706_3.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- 中澤（2002）中学生における学校運動部と地域スポーツクラブの選択要因の比較研究。日本体育学会大会号, 53 : 236.
- 西尾健・富山浩三・石盛真徳（2021）日本とニュージーランドの高校部活動の国際比較調査-複数スポーツを楽しめる環境を目指して-. 日本ニュージーランド学会誌, 28 : 11-24.
- 大林遙介・山口琢士・高橋豪仁（2024）中学生の学校野球部と野球クラブチームの選択理由および両者の活動状況についての比較研究。奈良教育大学紀要, 73 (1) : 125-134.
- 大坪健太・春日晃章・小栗和雄・竹本康史・竹内花（2022）中学校体育授業に対する生徒の嫌悪感特性-大学生を対象とした振り返り調査による検討-. 教育医学, 68 (2) : 157-165.
- 笹川スポーツ財団（2024）子ども・青少年のスポーツライフ・データ2023-4～21歳のスポーツライフに関する調査報告書-. 笹川スポーツ財団：東京.
- スポーツ庁（2018a）運動部活動の在り方にに関する総合的なガイドライン. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- スポーツ庁（2018b）平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果報告書. https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/19/1411922_084-

- 105.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- スポーツ庁 (2024a) 学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドラインに係るフォローアップ調査結果（速報値）. https://www.mext.go.jp/sports/content/20240821-spt_oripara-000037466_0051.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- スポーツ庁 (2024b) 部活動改革に伴う学習指導要解説の見直し新旧対照表. https://www.mext.go.jp/sports/content/20250116-spt_oripara-000039767_002.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- スポーツ庁 (2024c) 令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果報告書. https://www.mext.go.jp/sports/content/20241217-spt_sseisaku02-000039139_02.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- スポーツ庁・文化庁 (2022) 学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドライン. https://www.mext.go.jp/sports/content/20221227-spt_oripara-000026750_2.pdf, 2025年3月14日閲覧.
- 杉浦ちはる・渡邊将司 (2016) 中学生はどのような理由で部活動を選択するのか. 茨城大学教育学部紀要(教育科学), 66: 447-460.
- 武長理栄 (2018) 青少年のスポーツニーズと運動部活動-運動部活動の志向性からみる青少年の運動・スポーツ活動状況-. https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/column/20180718.html, 2025年3月10日参照.
- 當山貴弘・中須賀巧・杉山佳生 (2021) 体育授業の好き嫌いと学年からみた劣等コンプレックスの得点比較. 健康科学, 43: 71-80.
- 運動部活動の地域移行に関する検討会議 (2022) 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言～少子化の中、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会の確保に向けて～. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220722-spt_oripara-000023182_2.pdf, 2025年3月14日閲覧.